「2022 ISS-OUP Prize」授賞論文
紹　介

東京大学社会科学研究所（ISS）とオックスフォード大学出版局（OUP）は，2002年度から毎年，『Social Science Japan Journal（SSJJ）』に掲載された論文のなかから最も優れたものに「ISS-OUP Prize」を授与している．SSJJの編集委員会は，国際エディトリアルボードの推薦をもとに，現代日本に関する研究に最も寄与した授賞論文を決定する．主な選考基準は（a）研究テーマの独創性，（b）優れた理論的枠組み及び実証的データ，（c）当該分野の研究における発展的寄与である．著者の同意を得て，授賞論文は邦訳され，東京大学社会科学研究所の『社会科学研究』に掲載される．

今回紹介する論文は，2022年度「ISS-OUP Prize」受賞論文，Yujin Woo（一橋大学），“Homogenous Japan? An Empirical Examination on Public Perceptions of Citizenship,” SSJJ Vol. 25, No. 2, pp. 209–227である．

少子高齢化が進行する中，多くの先進国は，労働力不足を補い，過疎化した地域を活性化させるために，外国人労働者の獲得競争を始めている．しかし，移民受け入れには，想像であれ現実であれ，政策設計を左右しかねない数多くの課題がある．各国政府にとってのリスクのひとつは，現状維持の社会文化的慣習を求め，民族言語の多様化に反対する国内大衆からの政治的反発である．このような懸念から，社会科学者たちは，多文化あるいは多民族共存に対する国民の寛容さを学際的な視点から研究するようになった．

Woo氏による優れた本論文は，日本人が「シティズンシップ」（市民権）をどのように概念化しているかを独自のサーベイ実験で検証することで，こうした議論をさらに一歩拡張している．氏のサーベイ実験は，生まれ育った国や父親と母親の国籍が異なる仮想的な個人のうち，だれが「日本国民」としての要件を満たしているかを，回答者にたずねている．この手法により，これらの特徴の相対的価値を推定することができる．

その結果，移民に対する日本人の態度に関する多くの定説が裏付けられた．主な，しかし憂慮すべき発見は，父系主義が依然として存在していることである．回答者は，父親が日本人である個人を最も市民権を持つにふさわしいと評価する傾向が強い．父親が日本人の場合，次に重要なのは日本で育ったかどうか，その後に母親の国籍が続く．出生国が回答者の評価に与える影響は最も小さい．

Woo氏の研究の中心的な貢献は，民族的血統のヒエラルキーの解明である．市民権の

基準は一般的に，血統を優先するもの（jus sanguinis）と出生地を優先するもの（Jus soli）に分類され，日本の国籍法は前者に属する．本論文は，日本国民が考える血統主義の本質が，定説と微妙に異なることを示唆している．血統は重要であるが，それは主として父系的なものである．この発見は，皇位継承の父系相続を定めた皇室典範の改正に関する最近の議論と呼応している．男系男子の後継者が少ないため，女性天皇や皇女の男系男子の子孫を認めるべきだという議論が巻き起こったが，男系男子のみを維持しようとする人々によって改革は妨げられてきた．

多くの革新的な論文がそうであるように，本論文は答えだけでなく新たな疑問も提示している．例えば，なぜ現代の日本人は家系を最も重要視するのか．こうした考えは少数派が強く持っているのか，それとも多数派が弱く持っているのか．これらの態度の性質は，今後の移民および市民権政策の方向性に影響を与える．もし父系主義が主に高齢者に強く支持されているのであれば，平均的な選好は世代交代とともに変化するだろう．もし保守派にのみ重視されているのであれば，右派政権下で急進的な政策転換が起こる可能性は低いが，父系主義がイデオロギーに関係なく一般的に共有されているのであれば，政府の党派性は重要ではないかもしれない．

移民政策は急速に変化しており，日本だけでなく西欧や東アジアでも，外国人労働者の需要が大きな原動力となっている．現実的かつ人道的な理由から，これらの移民を単に使い捨ての労働力源として扱うべきではない．人口動態が急速に逆転しない限り，外国人労働者は日本社会の重要な構成要因であり続ける．彼らの社会的統合のハードルを下げること，そして生涯の大半を日本で過ごすかもしれない家族，子供たちの統合は，間違いなく彼らが日本に留まろうとするかどうかの重要な要因となるだろう．

本論文は，実験的手法を使って日本市民の態度の決定要因を検証する，因果推論に基づいた最先端の学術研究である．この問題領域に取り組む研究者は，日本国民が「均質な日本」というイメージをどのように受け止めているかについて，Woo 氏の研究分析を見据える必要があるだろう．

SSJJ 編集長　ケネス・盛・マッケルウェイン